

縮尺学会展望

『フランス革命とドイツ文学』

新井 皓 士

第十五回ドイツ文化ゼミナール、通称フェーリエン・ゼミナールの報告を致します。休暇研究会と申しまして「ドイツカヴァー・ジャーマニ」式遊山親睦会ではなく休暇を返上あるいは活用したという意味合でして、本年(一九七三)度は信州蓼科高原に全国各大学から集いました四十名の日独ゲルマニステンが三月二八日から四月四日迄約一週間、まことに真摯かつシンディ共同研究生活を送ったものであります。招待講師はかつて岡山大学、東京大学の教壇にたれたことがある、いや、何よりも現在G・フォルスター研究者、比較文学研究者、日本文学翻訳者として御活躍の西独フランクフルト大学ラルフリライナー・ヴーテノー教授であります。

さて今回の全体テーマ『フランス革命とドイツ文学』——これは本日五時から予定されておりました東独ライプチヒ大学クラウス・トレーガー教授の講演テーマと「奇しくも」と申しますか「仔細ありて」と申しますか、全く同一でありまして、さなきだに斯道の先達、碩学の方々を前にこのような高い処から

お話をすることで平静心を失っております私のような未熟の報告者にとっては、いやが上にも大いなる圧迫感の因となっておりますが、この会場へ入りました途端に手続上の都合で同博士の来日講演が中止になりました事を知り、いまや重圧感一転して当惑感、いふなれば惑乱の極に私は陥っておりますので、この報告には随分とお耳ざわりな点、疎漏があると存じますが、どうぞお許し願いたいのであります——は数年前はいざしらず今日では「ユニークだが少々際物臭い」印象がなきにしもあらずと申してよいかと思うのであります。といいますのは、このテーマの下で取上げられた対象の範囲は革命が勃発した一七八九年からナポレオンが第一統領となる一七九九年までの十年間を中心とする十八世紀末から十九世紀初頭におけるドイツ文人のフランス革命に対する反応や文筆活動でありまして、後世フランス革命を舞台として創られた、たとえばビュヒナーの『ダントンの死』やP・ヴァイスの最近作などは一応考察の範囲外におかれます。いいかえますと直接的に関係する文献・文書類は文学作品として自家独自の完結的世界を作りえていない、率直に言って二流作品や断片が大部分なのであります。そもそも十八世紀末といえはゲーテ、シラーという二巨人がまず私共の念頭に浮かび、ソノ蔭やイヤマシニ深シ、というところでありますが、そのゲーテについてみますと、一七九二年九月二十日、革命フランスにとって起死回生の一戦であったヴァルミー砲撃戦の夜に語ったという「ここ、そしてこの日から世界史の新しい時代が始まる」という一句が史書などにも好んで引用され知

られております。この言葉だけ取出しますといかにもゲーテが諸手を挙げて革命の成果を喜んでいともたれない事はありませんが、実はこの時彼はオーストリーと共に干渉戦争の一翼を担ったプロイセン軍に従軍しておりまして、いわば反革命陣営にある、しかも自軍が初めて撃退されたわけでありますから終始いかに我不関焉という態度を彼が保持していたとしても余り面白い状況にあるとはいえない。にも拘らず世界史の動向を鋭く洞察した、さすがにゲーテだと、私共のように彼の抒情詩をこよなく愛し彼の透徹した知性を畏怖する者は唯々感服したくなる。ところが事情は必ずしもそう単純でもないようで、この句の出でくる『滯仏陣営記』によりまして、進撃は阻止されし闇が迫っても火も焚けず意気銷沈している一同の集りに顔を出したゲーテが、日頃短い警句を放つては皆の気をひきたてる役を果たしていたところからこの時も発言を求められて右の一句を発し、一呼吸あって「自分らはその時その場に居合わせた」と諸君はいうことができますナ」と云々と書かれております。見方によっては人を食った話で、それを淡々と記録しているゲーテの真意が単に一場のエピソードとウィットにあるのか、あるいは自己の洞察力をむき出しのまま伝えるのを嫌って嘲哂しているのか、どうも要領を得ませんが、いずれにしても彼がこの世界史的事件の惹き起した熱狂に捲き込まれていない、革命にはむしろ冷淡であったことは否めないと思うのであります。それではいま一人の古典主義作家シラーはどうかというところ、九二年秋にワシントンやクロップシュトゥックと共にフランスか

ら名譽市民の称号を贈られた『群盜』『フィエスコ』の作者は、その頃イエーナ大学にあって結婚や大病という生活上の事件や史学講義準備と『三十年戦争史』等の執筆におわれて傷ましい程に忙殺されております。もちろん忙しいからといって革命を支持しない理由はないわけですが、かつて「暴君に抗して」とその著に銘うち「外面的自由」を追求した詩人はいまやカント研究に伴う美学・倫理思想の変化もあって「内的自由」をより重んじる立場に変わりつつあり、現実の革命に対する共鳴は期待に（？）いささか反すると申さざるをえないのであります。

古典主義に対するアンチ・テーゼとしてドイツでは登場したロマン主義に目を転じますと、前期ロマン派の最も鋭い論客であり旗頭であったF・シュレーゲルに、「フランス革命、フィヒテの知識学、そしてゲーテの（ヴィルヘルム）マイスターは時代の最も偉大な傾向だ」ということがあります。この奇妙な組合せは一見フランス革命を先頭に置いて強調しているようにみえますが、これに続く部分を読みますとどうも比重は後半にあるように思われる、つまり「騒々しくも物質的でもない革命の重要さに気づきえない人は、いまだ人類史の高所に立っていない云々」というのでありまして、ここには当初のかなり強い感激が徐々に冷めながら尚フランス革命を捨てきれぬアムビヴァレントな気分と、政治的革命的な局面とみなす初期ロマン派特有の普遍志向が典型的にあらわれていると私は思います。このようなロマン派に対する従来の評価を殊更極端に申し

ますと、一はどだい彼等の本質は反動なのだと切捨てる傾向であり、一は彼らの生んだ佳作群のいわゆるロマンチックな情感や憧憬に専ら重きをおき革命とか政治性には目をつぶる、いずれにしてもフランス革命とロマン派の関わりはせいぜい若気の至りで本質的には問題にならない、というわけでありまして、事情はヘルダーリンやジャン・パオルの場合も同様、いな、ゲルヴィーヌスの記述などを除けば、総じてドイツ文学史上フランス革命はほとんど存在しないかのように扱われてきた、といってもいいすぎではなかったのではありません。これにはプロイセン・ドイツ帝国成立に伴って一八七〇年頃より始まる文学史のイデオロギー化も影響しておりましょうが、ともかくこの分野の研究は最近漸く本格的に始まった、即ちまずDDRにおいて『フォルスター著作集』の選者ゲルハルト・シュタイナーなどによって端緒が開かれ、BRDにおいてもワルター・グラープ、ハインリヒ・シェールそしてヴーテノー先生などによって開拓されるにつれ、フランス革命のドイツ文学における意義があらためて認識されつつあるのであります。と申しますのも私共が「ザッヘに仕え」ます限り、当時において隣国のこの世界史的事件が単に政治的とはいえぬ複雑な反響をドイツに及ぼしたことを否定できない。確固たる保守主義者、専制君主論者は別として、一般的には革命の報告はかなり広範な熱狂や興奮を呼び、ヘンリク・シュテッフェンスは父親の回想においてよくこの興奮を伝えておりますし、パリにはシュラーブレンドルフを中心とするドイツ人サークルすら存在し、ヘーゲルまた『美

学』におけるクロップシュトゥック論の微妙な陰影によって当時の状況を垣間みせているのであります。むろん当初の感激は革命の進展につれて、特に戦争、王制廃止、国王処刑、いわゆる恐怖政治やテルミドル反動などを期として或いは冷め、あるいは反感に変わりましたもので、代表的な人をあげればクロップシュトゥックやヴィーラントはこれらを通じて徐々に熱の冷めた例ですが、ゲレスやフィヒテは統領政府成立に至って初めて共和国への期待を失ったといえましょう。解放戦争期のナシヨナリズムにのみ焦点を合わせた固定的視点からすれば不思議ともいえる革命への共感がドイツにも存在したわけで、しかもそれは偶発的とのみ云えぬものがある、つまり期待が既にあったのです。というのも古典主義はさておき、啓蒙主義とロマン主義は思想的には全く異質であると普通信じられ事実そういう面も強いのですが、同時にそこには明らかに継承されたものの、換言すれば十八世紀末ドイツには太陽王の時代以来指導的地位を占めてきたフランスに替って今度は自分達が人類史の発展に寄与する時だという一般的期待があり、それはレッシングの『人類の教育』にみられる新時代待望やヘルダーの文化的ナシヨナリズム思想を曲折して受け継ぐものであります。その為フランス革命は勃発時に、ルソーをも含め百科全書派によって用意されたフランス啓蒙主義のクライマックスだという評価と、これによってフランスの文化的覇権が終焉するという予期とが微妙にからみあった受取方がなされたのでありまして、いまやドイツはルターによって創始された精神の解放を包括的に完成する、

即ち宗教改革と（物質的）革命を綜合する使命を果すべきだとする独自の思考様式がここから生じております。それはF・シュレーゲルやノヴァーリスに典型的に表われますが、宗教改革と革命を相関的にとらえる見方そのものは経験主義的思想家フォルスターや最後のロマン主義者ハイネにもみられる傾向で、これをドイツ的観念思考の一変種あるいは後進国的焦燥の夢想と断じてすまず事もできますが、私はなおそこに片付けきれぬものを感じるものであります。ところで革命を間にはさんだ啓蒙主義とロマン主義の連続面は、流れの方向がもはや決定的に変ったときにいささか具合の悪いもの、ドイツ思潮を一元的に統制するには厄介なものとなった。ここから特に啓蒙主義とフランス革命の関係を故意に切離す操作が必要となるのでありまして、一七七六年の啓明結社や九二年頃のクラブ派に對する中傷——当時ドイツではジャコバン派と民主主義者および愛国者という呼称はほぼ同義的に用いられていました、それが国王弑逆者、売国奴という非難をかぶせられた——あるいは革命信奉者クニッゲのポピュラーな啓蒙書『人間交際論』が出版百年記念として再刊された折にこうむった致命的改竄などに、その顕著な例をみることができるのであります。

ひとり文学史のみをとりあげてもこのように再検討し補完すべき点が少なくないのですが、より広義に考えた場合、フランス革命の理念的遺産は現代に受け継がれている、いわば現代社会の価値観の一部をなしている事は改めて申すまでもない。市民社会の諸原理については多言を要すまでもありませんから、当

時は論議的あるいは躓きの石となったもので今日少なくとも言葉としては常識中に定着している例を二、三挙げてみますと、現在東西両独の国名の一部になっております「共和国」、またヘーゲルが『法哲学』において実に精緻博識な議論を展開している「輿論（公共的私見）」といった概念があります。これらは当時ドイツではほとんど外国語に等しいものであって、共和国といえは人々はいたずらにローマ史を回顧するばかりでありましたし、後者については、若い頃イギリスで暮した経験をもちバリの民衆動運を具にみながら生涯の幕を閉じたフォルスターが、繰返しその意義を強調しながら遂にこう嘆いております、「ドイツには七千人もの文筆家がいたが、依然としてたった一つの輿論も形成されない。」更につけ加えますと、変革とか革命ということばが社会的事象を指す標語として確立したのもフランス革命を経てからだと言えましょう。ケブラーは『天体の回転について』でレウォルティオという言葉を用い——これは我国における「回天」を想起させます——百科全書派はレヴォルーションを必ずしも政治的現象に限らず新時代の曙、出発というような意味で使っているようですから、宗教改革—仏革命—新時代という連関で時代をとらえ期待を抱いたシュレーゲルなどの考えも全く一人よがりとはかりもいえないわけであります。

縷々述べて参りましたが以上は要するに「フランス革命とドイツ文学」というテーマに市民権を与える為の大難把な展望でありまして、これからその研究上痛感される困難に触れ——実

はこの辺こそ私のような不勉強な人間にとって最も生々しく且つ独創的(?)報告の可能な部分なのですが、今しがた司会の方より「あと五分」という厳格な警告を受けましたので、駆足で通過せねばならぬのは残念であります——最後に本テーマのもたらすさやかな実りと申しますか、文学概念拡大の見とおしに触れたいと思うのであります。

さてテーマに付随する困難は大別して二種類で、第一は対象の性質上要求される基礎知識の問題、第二は資料上の問題であります。基礎知識、つまり思想史、文化史、社会史、政治史等広範多岐な領域にわたるものですが、これが欠除すると極めて初歩的なミスを犯しかねないという経験例をお恥かしい事ながら一、二挙げますと、ある古本に *Parlement* という単語が突然出て参りイタリックにも小文字にもなっていないものですから *Parlement* の誤植かと勘違いして読んでおりました。その部分の文脈自体では別段おかしくないものですから暫く愚者の平和を貪っていたのですが、やがてどうも変だという事になり、初めて高等法院と議會をとり違えていた事に気づいたものであります。またあるバンフレットの肩に 12・4・VI という数字がうたれており日付である事は明らかなので、気をきかしたつもりで VI を一七九六年と解しておりましたところ対応する事件がない、そこで初めて共和暦である事に思い至った次第で、西洋近代の暦日は換算の必要のない一貫したものだという先入見について囚われがちな私共は共和暦は別としても一五八二年のグレゴリオ暦採用以来、ドイツでは一七〇〇年頃まで新旧両教いず

れに属するかによって、英国では一七五二年まで、ロシアでは一九一八年まで、なにしろ数字で示されるので精確だと思いつている日付や年数にも多少留意せねばならぬことなど改めて銘記したものであります。またゲレスのように独得の修辭法、比喩的表現を好む人を扱うときは、文化史的背景に多少とも理解がないと、一言で馬鹿氣た煽情文書と片付け、著者の苦心といいますが、例えは『Das rote Blatt』——これは紅色新聞あるいは赤色時報とでも訳すべきでしょうか。赤旗とか紅旗とかにすればビタリでしょうが名義権の不可侵に抵触しますし、さりとてアカガミとは為難い——で天然痘の比喩を用いて革命を論じているのですが、これなど当時種痘に対する関心が一般に高まっていた事を——J・メーザーの『Patriotische Phantasien』の記事によってもそれは知られます。またジェンナーの実験は一七九六年五月です——忘れれば、唯々幼稚で無理筋の表現としか思えず、従ってゲレスの知性を疑うということになるわけでありす。勿論疑うこと自体は結構な事ですが、ゲーテやノヴァーリスにもみられるように当時科学一般に関心が強く寄せられ、その用語を比喩に使う傾向もあったという背景は承知しておくべきであらうと思われす。問題が政治史的局面、特にいわゆるマインツ共和国に関わってくると、更に厄介であります。事の経過だけを簡単に申しますと、一七九二年十月にマインツを中心とするライン左岸——フランス側からいえばシスレナン地域——が仏共和国軍の占領する処となり以後約半年間当地の

ジャコバン・クラブを中心とする一種の共和国が成立、しかしその代表がバリの国民公会でフランスへの自主的合邦を宣言した翌九三年三月三十日に当のマインツ周辺はプロイセン軍の手中に陥りマインツ自身も数ヶ月後開城して「一冬の共和国」は終焉、「裏切者のクラブ会員」には苛酷な運命が待ちうけていた、という次第で、この推移型態そのものは史上さして珍しいとは思えません。唯この場合マインツの君主は神聖ローマ帝国の選定侯であり帝国最高官職の大書記長(大宰相)であった上、「最後のローマ皇帝」フランツ二世の戴冠式や祝典が盛大に挙行されたのはマインツが仏軍の手におちるつい三ヶ月前の事でしたから、帝国の面目は丸潰れであるといえましょう。しかしそれは「建前上」ともいえるところが複雑なところで、実質的には解体同然の——帝国の「インテグリティ」を邪揄したゲレスの文や帝国解体の報に接した人々の無関心を記録する一八〇六年八月のゲーテの日記が想い出されます——帝国にとってトリア、マインツ、ケルンといった大司教領の連なるこの地域、三十年戦争期のいわゆる「坊さん小路」は割譲するに最も抵抗の少ない部分であり、事実九五年バーゼル講和の密約によって、又一八〇一年には正式にフランスに割譲されたのであります。それに加えてリカルダ・フーフが「空しい国際主義」と評した時のマインツ選定侯フォン・ダールベルクの曖昧で日和見的政治行動や、臣下を傭兵として外国に貸貸していたヘッセン方伯のような君主が近隣にあった事なども考慮せねばならない、つまり単に地理的要因ばかりでなく様々な歴史的・伝統

的要因の絡み合いが特にライン地方にあった事を視野に入れま
せんと、マインツの帰趨をめぐって渦巻く興奮や反応を十分に
は理解したいと痛感するのであります。
もはや予定の時間を超過し司会者が渋い顔をしていらっしや
るようなので慌てて資料上の問題に移りますと、まず既に散逸
したもの、あるいは簡単に見出せないものが少なくない、たとえ
ばかなり著名な詩人でもクロップシュトックの頌歌やビュルガ
ーの革命詩などはほとんど顧みられませんでしたし、フォン・
ハーレム、エルスナー、シュラーブレンドルフなどはいわば忘
れられた存在といつてよいであります。僅かにクニツゲや
レープマンの著作集が多少知られている程度でありますから、
W・グラープやH・シェール等の資料編纂は極めて意義深いの
であります。またこれと矛盾することを云うようですが、資料
過多故の困難という事もあります。つまり理想をいえば無数の
群小著述家や関係文献にことごとく目を通し資料的価値はかり
か文学的価値——粗雑なビラ、パンフレットの類にそれがある
ならばの話ですが——を評定する事を各自が為すべきでありま
しょうが、そんな事は不可能であるし文学的にはほとんど無意
味であります。網羅的でしかも簡潔かつ示唆多い手引書の必要
が痛感される由縁であります。一方シュレーゲルやゲレスのよ
うに一生を通じて思想的変化の大きい対象、あるいはノヴァー
リスのように矛盾を内包して揺れ動く思想の持主を対象とする
場合は、既成觀念にとらわれず瑣末な断片をも丹念に読むべき
であり、又それだけの価値もあります。というのは余りに

も総合性、普遍性を志向しすぎたが故に未完に終った断片の集積ともいべき彼ら前期ロマン派の存在自身も興味ある対象ですが、彼らが古典派とちがって自派の文芸ジャンルとして韻文ではなく散文を重視——F・シュレーゲルはロマン派文芸とは即ち長編小説であると申しました——したことが、ここで特に注目されるのであります。散文の地位がいわば決定的に強化されたこの文芸上の気運と、歴史は人間の手で変えうるという意識が一つになりますと、そこに輿論形成の有力な手段として評論^{フレイムスクリット}論^{フレイムスクリット}あるいは同時代史というジャンルが生まれうる、つまりA・ハウザーがドイツには欠除していると評するところの「文筆家であると同時に政治家であり、学者であると同時に著述家であり、すぐれた哲学者であると同時にジャーナリストでもある」^{「西ヨーロッパ独得の輿論の代表者」}が生れるチャンスが、十八世紀末から十九世紀初頭のドイツには存在したわけであります。ヴーテノーさんが紹介されましたW・L・ヴェカーリーンはこのような評論ジャンルの先駆者でありましたし、ヨーゼフ・ゲレス、フリードリヒ・ゲンツ、ゲオルク・フォルスターは、それぞれ立場こそ違え、高度の修辭的能力をも備えた評論ジャンルの代表的存在であると私は思うのであります。この三人の辿りました道、一人は激しい共和主義から様々な紆余を経てカトリックに転じ新成バイエルン王国ではば満ち足りた晩年を、一人はパークの影響をうけて立場を決定しメッテル

ニヒの懐刀として華々しく活躍した後ある種の諦観と共に余生を送り、若くしてキャプテン・クックに従って世界周航を経験した一人は最初の慎重な態度から徐々に革命の現実に関与し目をひらかれ失望と希望を繰返しながら一七九四年一月パリに客死する、この三人の運命はあたかも分裂ドイツの運命を象徴するかのようには思えるのであります。この第三の人ゲオルク・フォルスターの場合はとりわけ興味深い問題であり、またゼミナールの中心課題でありましたが、モハヤ時オソシ、縁アラバマタ語ラム、という事で本日はお許し願いたいと存じます。御清聴ありがとうございました。

後記

本稿は日本独文学会一九七三年度秋季研究発表会においてなされた口頭報告要旨を、本誌の性質を考え、またいささか体裁を整えて、文字化したものである。冒頭のドイツ文化ゼミナールは日本独文学会、日本ゲーテ協会、ドイツ語学文学振興会、ゲーテ・インスティトゥート東京ドイツ文化研究所の共催により例年開催されるもので、実質的に準備万端の勞をとられたゼミナール委員会の本年度メンバーは、慶応大学の中田美喜教授、響田収教授、埼玉大学三光長治教授並びに本学青木順三教授であった。

(一九七三・十二・八) (一橋大学助教授)